

「宣教師と西南学院」

出席者 志渡澤 亨氏（元中学校長）
林 利久氏（元宗教部事務次長）
リディア・ハンキンス氏（宗教主事）
古澤 嘉生氏（本学名誉教授、元神学部教授）
村上 隆太氏（前学長、元文学部教授）
司 会 小林 洋一（百年史編纂準備委員長・神学部教授）



司会：ご多忙の中、西南学院史紀要の座談会にお集りいただき、心から感謝申し上げます。紀要第3号では、「宣教師と西南学院」をテーマに特集を組んでおり、その一つとして、この座談会を企画いたしました。

西南学院は南部バプテスト派の宣教師によって創立されたいわゆるミッションスクールといわれる学校の一つです。企画広報課が作成いたしました宣教師名簿によりますと、戦前戦後、

75名の宣教師が西南にこられました。大学の場合、神学関連が一番多く、次が英文、英語などの語学関連、そして商学、経済の社会学関連が続きます。中高の場合も英語が主だったと思います。

それぞれが西南のために大きな貢献をしてくださいました。特に戦後の荒廃からの立ち直りに人的にも財的にもバプテスト宣教団の貢献が大きかったのではないかと思います。しかし、「宣

教師と西南学院」ということでは今、一つの時代の終わりを迎えていると思います。戦時中を除いて、西南において初めての経験だと思いますが、2004年以來、宣教師のいない時代を迎えています。この場合の宣教師がいないというのは米国南部バプテスト連盟国際伝道局¹派遣の宣教師がいなくなったという意味であります。この機会にこれまでの西南における宣教師の貢献に感謝しつつ、その働きを振り返って総括、検証して次に繋げていくということは今後の西南の歩みにとって、意義のあることと考えています。

お集まりいただきました皆さまは西南で働かれた宣教師の先生方と縁の深い方々だと伺っております。今日は、「宣教師と西南学院」の関りについて、宣教師の存在とその意義について、思い出を含めて、その思うところを語っていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

◇宣教師との出会い、思い出

林：私が西南学院の事務局に就任しましたのが1950年で、以来40年間、宗教部事務次長として定年退職した1990年までお世話になりました。宣教師のモアヘッド先生、尾崎主一先生や古賀武夫先生などとの交わりの中、西南学院における働きがスタートしたことを思い出しながら、この集まりに参加させていただいております。

最初、西南学院に就職したのは、「体育の用具整理を担当する者がいないのでどうか」とお勧めがあり、修猷館の

隣にある学校ということ以外、詳しく知らないままに西南学院に入りました。私は病気で胸を患っておりましたが、それがようやく良くなってきたところでした。ただし、普通、試庸期間は3カ月のところ1年間の試庸期間になったんですよ（笑い）。学生保健、特に結核予防についての文部省（当時）から非常に強い指導がありまして、その当時、福岡の結核予防会の責任者をしておられた学医の城戸先生と一緒に対応しました。結果的に学生1人に対して、1枚の記録が整えられて、私も城戸先生と一緒に結核予防の一端を担ったということは今もって大変うれしい思い出となりました。

司会：それでは、リディア・ハンクス先生にお願いしますが、先生はどのようにして西南に来ることになったのか、そして来られた時の西南の印象等について、まず語っていただければと思います。

ハンクス：なぜ、西南学院に来たかといいますが、9年前に教会で開拓伝道の牧師をしていたところ、当時、シート院長からお招きがあつて、「西南学院の宗教主事にならないか」ということでした。実は規程にある宗教主事という役職は2、30年不在で、シート院長は建学の精神を強化するために宗教主事を今こそ立てるべきだと思われたようです。

西南学院はレベルの高い学校という印象で、私は修士課程で牧師になるための資格を取得しただけだったので、無理だと思っていました。しかし、学内に宗教主事を置くという話がでてか

1 以前は「外国伝道局」と言っていたが、1997年に Foreign Mission Board から International Mission Board（国際伝道局）に名称変更がなされた。

ら、やっぱり真剣に検討すべきだと思いました。ちょうどその頃、宣教団は一段と保守的な方向に走ってしまっていた状況でした。シート先生がそれを見て、「このままでは女性牧師としての活動は長くないだろう²。西南学院なら、延長して牧会などができるかもしれない」と呼びかけてくださった。それまでの私の牧師としての使命と宗教主事の仕事がどういうところで一致するかというと、やはり宗教主事の仕事はその活動だけじゃなくて学内の牧会という役割だと考えました。つまり、学生、生徒、園児をはじめ、教職員も含めて、みんな西南に導かれてここにいるということは非常に意義深く、神さまのお導きだと思います。ですから、西南ファミリーというか、ここにみんな集められ、神さまの前で共に協力し、共に求めて、神さまのために努力している方々のお手伝いができればと思っています。

志渡澤：私は1953年に大学に入って1957年から中学校の教員になりましたが、在任期間は専任としては1991年3月まで、その後非常勤講師として4年間勤めました。そもそも西南学院に入ったのはどういうことかということ、自宅（久留米市）が西南学院教会の伝道所になっていたからです。はじめは確か1948年か1949年だったような記憶がありますが、私はまだ中学生でした。大学時代にお世話になった先生方のことが忘れられず、実は今回、この座談会に出席してくれないかと打診があったとき二つ返事で引き受けました。

私は高校3年生の時に西南学院教会でキャロット先生からバプテスマを受

けました。全体の礼拝は、中高のチャペル³で行われていました。大学時代にグリーククラブに入り、そこで当時部長だったシェパード先生に出会いました。後にチャペルクワイアができて、最初はシェパード夫人が部長で、古澤先生も関係しておられました。私はそのメンバーだったので、シェパード先生ご夫妻と非常に関係が深くなりました。

グレーヴス先生が指導されていたESSは、毎年、英語劇を上演していましたが、田中輝雄先生が演じられた「ヴェニスの人」のシャイロックは当たり役で有名でしたよ。私はESSに入っていませんでしたが、3年の時にグレーヴス先生から声をかけられて「お気に召すまま」の中の役を演じました。

そういうことがあって、大学時代は非常に宣教師の先生方と交流が深かったわけです。もう一つは古澤先生が留学された後、チャペルクワイアに関わりがありまして、その時に男声のパートが足りなかったので、キャラウェイ先生、フィルダー先生、ホートン先生、この3人にメンバーになってもらいました。とにかく卒業してからも宣教師の先生方の思い出がずっと残っていましたね。先生方は一言でいうと私たちに対する愛が豊かであったということです。

司会：ありがとうございます。それでは古澤先生どうぞ。

古澤：西南学院に奉職したのは1958年10月で、神学科助手ということでした。2000年3月末日で定年退職しましたので、約42年間、専任として勤めさせて

2 牧師は男性に限るという保守的な考えの故に。

3 現在は大学博物館になっている。

いただきました。入学したのは1949年、大学創設の年、大変に希望を持って入



学いたしました。最初の4年間は英文学専攻で、1953年に卒業し、その後、神学科で2年間神学を学びました。卒業の年にアメリカに留学し、教会音楽を専攻、3年間の課程を終え、帰国後すぐに母校に迎えられました。

私の伯父が古澤正雄という謹厳なキリスト者で、1916年、西南学院創立当時、C. K. ドージャー先生の時代に国語の教師として西南学院中学部で教え、教頭も務めたと聞いております。それから私の兄が1941年、当時の中学部、後の高等学校（英語）に勤めましたので、西南学院との関係は深かったですね。また私は1942年、隣の中学修猷館に入学しましたので、その頃からこの辺一帯の地域はよく知っております。

終戦（1945年）になると米軍の駐留が始まります。日米（学院宗教主任・米従軍牧師）の協議で、西南学院講堂で毎週盛んなキリスト教の合同集会が開かれました。英語で讃美歌を歌い、祈り、説教があったのです。その集会の後においしいコーヒーとクッキーのリフレッシュメンツが出ていました。何もない時代でしたから、それがうれ

しく楽しみで、毎週来ておりました（笑い）。その頃から、教会が身近に感じられ、西南の宣教師の先生方とも親しくしていただきました。

司会：ありがとうございます。では、村上先生お願いします。

村上：私は中学、高校、大学と西南でしたが、その前、生まれて間もなくキャンパスの中に住んでいまして、中学以前から他の先生とも家族的なお付き合いをさせていただきました。中学校に入ってから、英語の授業はタッド先生とグラス先生が主に担当されました。タッド先生は高齢で、中学生は「タッドばあちゃん」と呼んでおりました（笑い）。割りとしっかりと厳しい授業をされましたので、英会話に関してはみな慣れていたと思います。

大学では授業で、グレーヴス先生、キャラウェイ先生に習い、私は直接授業には出ていませんでしたが、アメリカ文学のジェームズ・ウッド先生のご家庭に招待されたりしました。印象深いのはキャラウェイ先生が、キリスト教的というよりは仏教的なお話があって、宣教師でも日本の宗教に詳しいんだと驚きました。それから、高校の頃からC. K. ドージャー先生のご息子のエドウィン B. ドージャー先生のご家庭にも遊びに行っていました。そういう意味ではドージャー先生が西南の国際的なのというか、アメリカ的な雰囲気を作り上げていたと思います。家族的には私の母がコーブランド夫人と親しく、よく行き来していました。コーブランド先生も立派な方でしたが、コーブランド夫人も地域の夫人たちとの交流を通して、いい働きをされたと思っています。ギャロット先生にも干渉のご自宅に招待していただいて、先

生がフルート、奥様がピアノというようなファミリーコンサートをされてきました。あの時代は家族付き合いというのが多く、奥様も一緒に地域に入っておられ、教会関係や学校関係で非常に親しくしており、まさに西南ファミリーの中に入っておられたと思います。そういう意味では、宣教師名簿のどのお名前をみても、大変懐かしく親しい思い出が少なからずありますね。

司会：ありがとうございます。それぞれに自己紹介含めて、西南での宣教師との出会いについて触れていただきありがとうございます。まだ、十分にその思い出について語っていただいたわけではないのですが、それは次で触れていただきたいと思います。

ここで、ハンキンス先生に宣教師というのはどういう宣教思想というか、宣教理念をもって日本に派遣されるのかお話ししていただきたいと思います。それと私たちが興味を持っているのは、宣教師が年1回でしょうか、外国伝道局に提出するレポートです。それをみると、宣教師の方が西南でどういうふうに働いて、どう見ていたのかという日本側では見られない西南の裏面史というのが分かるのではないかと思います。

ハンキンス：自分の国を出て他国に行くというのはかなり大きな決意で、よほど強い意思がないと難しいと思います。そして宣教師の先達たち、ドージャー先生、タッド先生の時代は、本当に海を渡って一生を過ごし、外国で死んでもかまわないという強い決心だったと思います。私の時代は、船ではなく、飛行機の時代でしたけど、それでもそういう強い意識を持っていました。親に怒られたほど宣教師になることを強



リディア・ハンキンス氏

く訴えた記憶があります（笑）。そういう精神がアメリカの教会の中で育ち、神様から使命が与えられ、宣教師になる手続きを経て、赴任地の日本に到着します。そうすると、想像していた世界とかなり違うんですね。すでに教会があるし、立派なクリスチャンがいるというように、国内ではすでに伝道活動がかなり進んでいるということが分かるようになります。幸いなことに、私は最初、2年契約でジャーニーマンとして派遣されましたけれども、そのオリエンテーションの中で「あなたは伝道に行くのではなく、まず学びに行くんですよ」と何度も言われました。つまり、その国において神様がすでに何をなさっているのか、まず学びなさいということでした。この国でどのように伝道ができるのか、どのような方針がいいのか、日本のクリスチャンに是非教えていただきたいと思います。おそらく誰でも経験あることだと思われ、うまく一致ができる人は日本での伝道もうまくいくだろうと思います。

司会：非常に貴重なお話を伺えてうれしく思います。今後、西南学院の百年史を編纂していく場合に、宣教師が西南をどういうふうに見ていたかが知りた

いので、そのレポートをどのように宣教師が書いていたのかというところはどうでしょうか。

ハンキンス：それは調べないといけない。というのは、レポートをいつまで保存しているかわからないし、報告の仕方は途中で変わっているんです。昔の人たちは文章でレポートを書いていたと思いますが、私の時代は簡単に数字だけだったと思います。それは望ましくないし、参考にならないと思います。

司会：年に1回ですか。

ハンキンス：たぶん、そうです。

◇西南学院における宣教師の 貢献・意義

司会：それでは、ここで西南学院における宣教師の貢献と意義に移っていきたいと思います。

宣教師の方は建学の精神の担い手としての存在が非常に大きいと思いますが、それと同時に西南という教育機関の中での教育面、研究面での貢献については、皆さん、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。あるいは、宣教師の存在が必ずしもプラスではなくて、負の部分がなかったか、その辺のところはいかがでしょうか。

古澤：私は1949(昭和24)年、大学に入って、まず赤レンガの講堂、チャペルの印象が強烈でした。ギャロット先生が学長でした。そして、学長自ら前に立って、讚美歌の指導をされています。左利きだったせいか、特徴のある格好でしたが、私たちは先生からかなりの影響を受けました。ギャロット先生は個性の強い方で、たくさんの有益

な話をされました。先生の生き方ですが、例えば、部屋を入るときには必ず「どうぞ、お先に」と日本語で言われる。とにかく人を大切にする生き方に徹しておられて、そういう生き方、精神が西南に植えつけられたと思っております。ギャロット先生の葬儀がランキン・チャペルで行われ、弔辞を杉本勝次先生が述べられました。その話は忘れることができません。戦争が始まって、ギャロット先生が収容所に入られた頃には、人々は物の配給を受けるために並ぶのです。すると、先生は、例のごとく「どうぞお先に」と遅れてくる人たちに前に進められました。終わりには、配給の物はなくなる。ギャロット先生は落ちている菜っ葉などを拾って帰られたというのです。その話をして、気丈な杉本先生でしたが、声を詰まらせられました。そういうことから分かるようにギャロット先生は、大学の創設当時から身をもって人を愛する精神を植えつけられようと思われたのだと非常に強く感じました。

もう一つのことは、忘れもしません、1974年5月11日の創立記念日の式辞で、ギャロット院長は、「太宰府天満宮に行ったときに立派な大木が育っていて、すばらしいと思った。しかし、よく見ると、そこに大きな空洞がある。西南学院も大きな立派な大学になってきているが、本当はそこに空洞があるのではないか」ということを訴えられました。印象深い話でした。そして先生はこの話をされて、その足で福岡空港から手術のため帰国されましたが、その甲斐もなく亡くなられました。

4 理事長、西南学院経済専門学校の校長等を歴任し、衆議院議員や福岡県知事も務めた。

司会：とても感銘深いお話をありがとうございました。林さんはどうですか。

林：ギャロット先生はチャペルで講話中に突然、演台の上にあがって話をされたことがありましたね。印象深く「ギャロットを忘れるな」という思いだったと後で聞きましたが…。

古澤：いや、それは「ギャロットを忘れるな」ではなく、「高いところに上れ」という意味ですよ。旧1号館の3階303号室の大教室で最初の卒業式がありました。1952年のことです。その時、私はオルガンを弾いていました。ちょっとやりすぎだと思ったんですが、ギャロット先生は九大の学長など来賓が大勢いる前で、演台の上にも立たれたのです。私の隣にグレーヴス先生がおられました、「お、おっ」と驚いて心配されていました（笑い）。これは聖書を引用して、「高き山に登れ」ということを強調されたのです。翌年はギャロット先生が帰られて、コーブランド先生が学長になりましたが、先生は「去年の卒業式を思い出すと、自

分も演台に上りたいような気がしなくもない。しかし、むしろ私は地べたにひれ伏さなければならない」と言われていました（笑い）。

司会：宣教師の西南における貢献及びその存在意義についてお話していただきましたが、他の皆さんはいかがでしょう。

村上：古澤先生がおっしゃったように、宣教師の方々のキリスト教の伝道と建学の精神を守るといふか、進めるといふことについては本当に強い、大きな貢献だったと思います。戦後の日本の社会状況の中であって、個人的には、その他に宣教師はアメリカの生活を示すという役割もあったと思うんです。今でこそ西南学院大学はフランスやイギリス、中国とも交流していますけれども、非常にアメリカ的であったと、それも豊かなアメリカだったと思います。宣教師のご家庭に招かれて、一緒にいただいた食事やまた家においてある通信販売の雑誌で「シアーズ⁵」を見て、アメリカって豊かなんだなと、



5 シアーズ (Sears) は、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴに本部がある百貨店。カタログによる通信販売で知られた。

つまり羨望の気持ちを持ちました。宣教師というのはある意味、その国の文化も一緒に紹介していると思うんです。我々にとっては憧れの先進国であった。少なくとも戦後の貧しい時代の中では別の世界を垣間見たような感じでした。それは今でも我々の年代では宣教師、アメリカ人、アメリカの社会と多少なりとも繋がっていて、それはアメリカという国にとっても大きな貢献だったと思うんです。信仰と関係ない世界ですけど、心情的にそうだったと思いますね。

司会：西南が海外との大学の連携、留学制度をこの九州の地域にあつては最初に始めたということですが、それも宣教師の影響が大きいですか。

村上：それは、ご存知のようにペイラー大学との姉妹校関係が1971年から始まっていますから、それをベースに留学の話もあったわけです。その当時はおそらく早稲田大学くらいしかなかったと思います。日本においては留学生別科、つまり、受入れと派遣の体制があつて、西南は非常に先進的でしたね。

司会：他にどうでしょうか。



志渡澤 亨氏

志渡澤：当時は大学が小さくて個人的な交わりが深かったと思います。それか

ら、ギャロット先生の思い出はフルートを吹かれたことと、板書を左手で書かれたこと。我々の知らないような昔の画数の多い字を書かれる。しかも、どこから書き始めるか分からないんですよ（笑い）。そして、何の字だろうかと思ってみると、とても難しい字ができあがるんですよ。皆驚いていましたね。

その他の先生ではキャラウェイ先生は非常に体格がよく、しかも東福岡教会の宣教師でしたから日蓮さんと呼ばれていましたね（笑い）。あそこには日蓮上人の像があるでしょ。私が受講したのは英詩でしたが、知識が非常に深く、広いという印象がありますね。ただ、私はあまり真面目に聞いてなかったんですよ。いい話だと思って聞いていたんですが、先生のいい声に、ついうとうとしてしまいましたね（笑い）。

古澤：キャラウェイ先生は神学部で比較宗教学、仏教学の話を講義しておられました。京都にしばらく住まれて、同志社大学の神学部でも仏教、比較宗教学を、奈良女子大学で英文学を講義されていたようです。あの先生も西南学院のために非常に貢献されたと思いますね。他の大学にまで行って教えられましたし。

村上：キャラウェイ先生は、授業じゃなかったと思いますが、頭蓋骨を壇の上において説教をされたことがあつて（笑い）、度肝を抜かれました。確か、教会でも同じことをやっておられて、死生観についての非常に印象的な話し方も強い印象を残すような教材を用いられていました。

志渡澤：グレーヴス先生はシェークスピアを盛んに授業で取り上げていたんですが、ハムレットを教わった時に4つ

の有名な独白の中から1つを選んで皆の前で発表するのが宿題になりました。その頃、テープレコーダーはなくて、レコードだったのですが、「練習するために聞きたい人は家に来なさい」と言われて、何度も行った記憶がありますね。

司会：職員のみからみた宣教師の貢献はどうでしょうか。

林：グレーヴス先生は、学内では英語しか使いませんでしたね。

志渡澤：そうです。それで、英語で話しかけられては大変と、学生は先生を見かけると逃げていたという話があります（笑い）。

林：実は大きな勘違いで、皆はグレーヴス先生が日本語を知らないと思っているわけです。電車の中で学生がとんでもない話をしていても、じっと聞いて、その学生のところへツカツカと寄って行って、「そういう話はこんなところであるものじゃありませんよ」とたしなめられたという話を聞きました。日本語の達者な先生だけど、「西南の英語教育のために、もしも私が役に立つなら」ということを言葉の端々に言われたので、さすが、西南に来ている宣教師の方だなあという印象を強く受けました。

もう一つはギャロット先生ですが、この先生の印象深さは心に残りますね。どんな質問をしても日本語で返事が返ってきて、よく勉強しているということがよく分かりました。それから、ギャロット先生から年賀の言葉を書いていただいた色紙をいただきました。それは私にとってはすばらしい贈り物でした。「父の御神よ この年も… 常にあらわさん 御さかえを 1964年元旦 W.M.ギャロット」



林 利久氏

と筆で書いてあるんです。それを正月の床の間の飾りにしていたんですが、最近は、正月だけではなく、毎日その前で祈るという生活になりました。

それから、モーアヘッド先生は、車の横に「福音自動車」と書いたステーションワゴンに4人の合唱団を乗せて、病院などを訪問していました。本当にすばらしい働きで、一つも苦勞をいとわずに奉仕なさったことは周囲の人たちにどれだけ深い印象を与えたか分かりません。私もそういう機会に西南学院バプテスト教会を知ってクリスチャンになりました。

村上：今、自動車の話が出ましたけれども、ホートン先生も大きな車を持っていて、私たちはホートンバスと呼んでいました。10人くらい乗れたと思います。当時は個人的に自動車を持つような時代ではなかったので、教会訪問には人形芝居などの荷物を積んで行っていましたね。当時、宣教師の車はよく利用させていただきましたが、そういう意味ではそれも大きな貢献ですよね。

司会：西南が関わったのはバプテスト派の宣教師なんですね。バプテスト派というのは万人祭司制を強調して、民主的な教会運営をする派です。それで、大学の宗教部長、チャプレン、これは

他のミッションスクールでは按手を受けた、いわゆる牧師や教職になるんですが、西南の場合は必ずしもそうではありません。それでチャプレン会議に行くと他大学の方から牧師ではないんですかと驚かれるんですね。牧師でない方も宗教部長をやってくださっているのはすばらしいことで、これは非常にすぐれたバプテストの伝統が受け継がれているなと思います。

村上：宗教部長の選出は、昔は選挙ではなくて宗教局長の指名ではなかったですか。以前は宗教局長が適切な人を推薦されていましたね。

司会：そうです。でも、いわゆる按手を受けた牧師ではない、経験者ではないということは非常にユニークだと思います。

古澤：宣教師の中ではフィルダー先生がそうでした。当時は宗教主任と言っていました。フィルダー先生は国際経済学を教えていて、宗教主任をされていました。それも大学にとっては大きな貢献だったと思います。それから、英語関係の授業の他にシェパード先生は社会学を教えておられました。現在は宣教師ではありませんが、デビッド A. ジョンソン先生は生物学を教えておられて、牧師ではないと思います。

司会：こういう神学関係じゃない宣教師の方が宣教師として派遣されるには半年間くらい神学校に行つて科目を取らないといけないということですね。

ハンキンス：そうです。とにかく新約、旧約聖書を神学部レベルで学ぶことが要求されます。私の記憶ではある時期は神学部とは別に各学部で宣教師を配置するという動きがあったのではないかと思います。経済学部はフィルダー

先生というように。そして、外国伝道局の考え方も今は変わりましたが、当時は宣教師になる人はそれぞれの専門を生かして海外に派遣しました。それは一時期、非常に強調され、認められ、うまく生かされていたと思います。

司会：先ほど触れました負の部分のご意見がなく、宣教師の貢献だけ強調されましたが、学校の運営に関わつた先生方にお尋ねします。例えば、財的にも人的にも援助を受けると、当てにするというか、依存体質ができてしまつて、自立精神や特に卒業生からの寄付を活用しながら学校の発展を考えたいときになかなか寄付文化が育っていないんじゃないかと思うのですが、海外からの、特に伝道局からの援助と関係しているのではないのでしょうか。

村上：西南学院が創立されたころから、戦後の日本の貧しいときにも南部バプテストの諸教会の援助で西南は立派な建物を建てているわけです。それは他のところが得られなかった絶大な財政的な援助だったと思います。それがあつてこそ今があるわけですから、私はその辺ではプラスはあつてもマイナスはなかったと思います。確かに援助を当てにはしていましたが、やがて自立できるようになったから言えることで、それまでは本当に“おかげさま”という感謝の気持ちでいっぱいでした。戦後、教会からもりっぱな古着（笑い）や食べ物など支援物資を送つていただいた、それは感謝しきれない支援でした。

司会：ララ物資⁶とういうのがありましたが、あの配給は西南が拠点になつたんですか。

村上：拠点になつたかどうかは分かりませんが、配給を受けたのは確かですね。

ただあの支援物資は、いずれ返さないといけなかった。20年くらい前に日本がそれまで受けた戦後の経済支援を返還しないといけないということで、返還したと思います。



古澤：ララ物資は公的な印象ですね。ギャロット先生やグレーヴス先生の家にも南部バプテストの教会の方から支援物資が来ていました。

◇宣教師の教会形成

司会：今まで西南における宣教師の貢献等についていろいろ語っていただきましたが、西南で働かれた方は教師としての資格をもった教育宣教師だったと思いますが、皆さんそれぞれが教会形成にも熱心だったという印象をもっています。アメリカ南部バプテスト連盟外国伝道局は、西南で働いていた教育宣教師の場合でも教育での貢献よりも教会形成の貢献の方をより高く評価したのではないかと印象を持っています。実際、福岡市内でも西南の宣教師が開拓した教会がいくつかあると思

います。この宣教師の教会形成の関わりについてお話いただきたいと思います。開拓伝道に携わった方が多かったと思いますが、いかがでしょうか。

古澤：モアヘッド先生は直方、飯塚、田川方面の炭鉱地や久留米などあちこちに行かれたのですが、私はその通訳やヘルパーなどでアルバイトをしていました。また、ギャロット先生は本当にいろんなところに開拓の伝道をされました。カルペッパー先生は長住教会、野方教会など、活動範囲が広がったですね。

村上：コールマン先生は甘木の方でした。

司会：学校に勤める教育宣教師でも教会形成というか、開拓伝道をしなさいという期待をされているのですか。

ハンキンス：改めて言う必要はないでしょう。それが使命の一つで、平日は学校、日曜日は教会という精神でいました。昔の宣教師は現在の私たちよりも倍くらいの時間と、倍のエネルギーがあつたんじゃないかと思います。皆一生懸命でしたね。

司会：平日、西南学院という教育の現場で一生懸命教育する。もちろん、チャペルもありますから、そういう機会に宗教活動するわけですが、そうでない日は開拓伝道のために宣教師の使命ということで取り組んできたわけですね。

ハンキンス：そうですね。宣教師の身分があれば自分が委託されている仕事、つまり西南学院から給料をもらっているという意識は全くない。アメリカの教会の一人ひとりのおばあちゃんのお金によって自分が生きているという意識で、その使命を大事にしているとい

6 アメリカのアジア救援公認団体（LARA；Licensed Agencies for Relief in Asia：）が提供していた日本向けの援助物資のこと。

う感じでしたね。

昔はどの教会でもある程度、形成されたらすぐ、伝道所をどこで開拓するかという課題意識があったと思います。福岡教会、西南学院教会などでもそうでした。だから、80年代の私たち宣教師は、疲れ果ててしまいましたが、「開拓伝道に出かけなさい」と伝道局からプッシュされるようになりました。

村上：確かに教会が徐々に固まってきて、財的にも人的にも次第に力をつけてきたら、開拓伝道所をどこにという話は自然と出てきていましたね。ですから、西南学院バプテスト教会もあちこちに伝道所をもっていましたし、それらがやがて教会に形成されてきましたね。

司会：その場合も伝道所は宣教師が担っていましたか。

古澤：宣教師がおられた頃はそうでした。ただ、英文学の坂本重武先生などが伝道所を担当されている時がありましたね。

◇宣教師のいない西南学院

司会：福岡市内の大半の教会というのは、西南学院で働いていた宣教師が関わって現在に至ったということですね。次に宣教師のいない西南学院についてですが、最初に触れましたように、2004年からアメリカ南部バプテスト連盟国際伝道局から派遣された宣教師がいなくなりました。いなくなって初めてその存在のありがたさ、大きさに気づくというのはよくあることですが、ハンキンス先生は2003年8月まで国際伝道局の宣教師で、その後は西南学院の専任の宗教主事になられました。そこで、宣教師のスピリットというのは変わら

ないと思いますが、変わったものは何か、それから宣教師辞任に至る経緯について、可能な範囲で結構ですので、分かち合っていたいただければと思います。

ハンキンス：私は1998年から宗教主事の非常勤として西南学院にお世話になり、翌年から嘱託、その2年後から専任の宗教主事として勤めさせていただきました。しかも、給料、生活費はアメリカの伝道局からそのままでした。おもしろいことに、私は大学で働いた経験がなかったし、ずっと牧師として伝道局から給料をもらっていたので、非常勤の意味が分かりませんでした。また、使命が宣教師のままということで、自分がフルタイムだと最初から思い違いをしていました。少しずつ学校の制度が分かるようになり、「パートなら毎日通勤しなくてもよかったな」と初めて気付きました。でも、もうその時はすでに専任になっていましたけどね

(笑い)。2004年に伝道局とは、私たちの希望ではなく、無理やり関係を切られてしまいました。2004年までは人件費もアメリカ側の負担で、宣教師として奉仕しましたが、今後、西南学院がそれを負担して自分たちを雇ってくれるのかという疑問がありました。しかし、2004年から西南学院が人件費を負担してでも、私たちが期待され、求められているということが分かり、何よりも感謝でうれしく思いました。今後、アメリカの伝道局は、学校、病院などの施設には、全く宣教師を派遣しないことを決めています。ですから、宣教師という形で求めるならば、他の伝道局、新しくできた「コーポレイティブ・バプテスト・フェローシップ⁷」の協力を得るとか、または全く

新しい求め方を考えなければいけない
と思います。

古澤：「コーポレイティブ・バプテスト・フェローシップ」から宣教師を送るというのは経済的に可能なのでしょうか。

ハンキンス：日本の物価は高いので、経済的な面では無理です。例えば宣教師にふさわしい人材を探してもらおうという協力になるでしょう。また教員になる前に語学力を鍛えるということがネックなので、短期間だけでもサポートしてもらって、日本語を学んでから西南学院が専任の教員として受け入れるという協力関係を結ぶことは可能だと思います。「フォー・エル・ファウンデーション⁸」もそのために活動しています。

◇宣教師の専任教員雇用に至る経緯

司会：話に出ましたように、国際伝道局を辞任された4名⁹の元宣教師の先生方を専任として採用することは西南として初めてのことで、大変な決断だったと思いますが、元学長、常任理事として、これに関わってこられた村上先生にその辺のところを可能な範囲で結構ですので、お聞かせいただければと思います。

村上：この件については、実際には田中前学長の頃からの経緯があります。私が文学部長をしていた頃に教員の定数に関する委員会が設けられました。それは以前から学内の教員の配置がバランスを欠いているのではないかということで、現状とそれを改善するために、どの程度異動が必要かという答申を出しました。



7 Cooperative Baptist Fellowship (CBF、協力バプテスト連合)：根本主義化した南部バプテスト連盟内にできた中道グループ。

8 Four L (4L) Foundation：シート前院長が中心になって設立したアメリカにおける西南学院支援機関で、4Lは聖書のLife (生命)、Light (光明)、Love (愛)、Liberty (自由)を表している。

9 その他に非常勤講師として3人が辞任することになった。

1998年の10月頃でしたね。その後、私が学長に選出されたので、田中学長に提出した答申案を自分で実行することになりましたが、その中には定数改正の問題と同時に宣教師の今後の問題がありました。それはなぜかという、それ以前に私はシート先生などから南部バプテストの動向の情報を得て、遅かれ早かれこの問題を考えないといけないと思ったからです。シート先生やH.C. ジョンソン先生などは間もなく宣教師の定年なので任期を終えるという方向で話が進みましたが、他の方々の処遇について考えなければなりません。それで私は希望があれば、現在の仕事をそのまま継続し、人件費は大学で負担するという案を作りました。その理由は、学院の創立から現在まで、多大な援助、奉仕をしていただいた宣教師の教育的効果は絶大なものがあり、従って、過去の援助に対して我々が宣教師の給与を持つことは当然だということを説明しました。特別大きな反対はありませんでしたし、むしろ、いい働きをしていただいているので、残ってもらったほうが助かるという意見もありました。ただ、問題は宣教師がいない学部からは「アンバランスではないか」という意見はありましたね。結果的に宣教師の皆さんは、今までと同じような働きを続けて、給与だけは大学が負担しようということで、切り替えの時期、2004年に最終的な理事会の承認を得て、そのまま専任教員として採用しました。私としては皆さんに、予定通り残っていただくことができ大変うれしく思っています。

司会：ありがとうございました。西南学院における宣教師の意義を語っていただきましたが、既に話は及んでおりますけれども、宣教師についての今後の希望、期待、先ほどは、例えばCBFとの協力関係や可能性、それから4L（フォー・エル・ファウンデーション）の話も出ましたが、ハンキンス先生の話では、特に病院や教育施設と伝道局との協力関係は今後難しいということでした。しかし、宣教師の存在の大きさや貢献度を考えると、やはり宣教師を西南学院に迎えたいという期待や希望では皆さんほぼ一致しておられると思いますが、どうすればそれが可能になるのかという構想、理念を含めて最後に語っていただきたいと思います。はじめに特別教員枠のような形でこちらから費用を出して宣教師を迎えることは可能ではないかということで、村上先生が考えてこられたと思いますが、いかがでしょうか。

村上：宣教師に代わる特別教員の枠の規定を設けようとしていましたが、まだできていません。私としては、この枠をどうするか、どういう形で来ていただくか決着がつきませんでした。というのも、特任教員の処遇にかなり手間取りましたし、宣教師の件が一段落してからとっていました。その後の教員定数については3年毎に見直すという規定がありましたけれども、実際には見直されませんでした。それは規定の上で準備されていましたが、人選、配置、待遇についての詰めができていなかったからです。その後、ご推薦があった方がいらっしゃるにもかかわらず、その対応ができていなくて申し訳なく思っています。

◇宣教師についての今後の希望・期待

司会：最後に宣教師の存在の意義を含めて、今後の期待を一言ずつ語っていただきたいと思います。



ハンキンス：継続させていただいている私たち4人の宣教師を考えてみると、全員70歳まで働くとしても、皆20年以内に退職します。ですから、西南学院にとってアメリカ人の宣教師がいてくれることがどれほど大事なかは、これからの課題だと思います。私たち4人は宣教師の身分はありませんが、宣教師の精神はずっと持ち続けていると思います。私たちの影響は、歴史的に考えるとささやかな働きに過ぎません。これから4人が徐々に少なくなっていくし、20年以内に退職して全くいなくなるということで、文化的、語学的、信仰的な事柄がどれだけ大事にされているかが大きな課題だと思います。

林：私は干隈の学院住宅に住んでいました時、コーブランド先生からクリスマスなどに食事に誘われました。先生との家族ぐるみの交わりの中で、私たちも裸の付き合いができ、精神的なものや文化的なものを得ることが最大の目的のように感じました。そういう宣教

師が日本を知るために、いかに努力をしているかを含めて、交わりの中で学べる、それが日本にいてもできるんだと大変幸せに感じました。そして、グレーヴス先生から庭の小さな苗木を分けていただいて、それが現在の我が家で成長しているというのが喜びです。コーブランド先生、ギャロット先生、その他の先生方とのお付き合いが、どれだけ私たちに影響しているかということとはとても言葉では表すことはできないことだと思っております。

志渡澤：中学校には専任の宣教師としてフェナー先生、後にダーリー先生に来ていただきました。中学生の年ごろは人間的に強い影響を与えられるものです。今、宣教師の方がいらっしやらないのは残念ですね。

村上：先程の続きになりますが、ハンキンス先生がおっしゃったように以前と比べると宣教師の身分の方がいらっしやらないことは残念なことだと思います。やはり、西南学院がキリスト教学校である以上、教育を担当していただけるネイティブスピーカーの宣教師の先生がいるということは大きな力だったわけです。それは非常勤の先生で補っていますが、それはあくまでも非常勤であって、全生活を投入してくださるような宣教師の役割をしてくださる先生が必要だと思います。ただ、宣教師というのは送る側があって、宣教師ですから、こちらから来てくださいという時は宣教師という身分は難しいだろうと思います。ですから何らかの形で特別な役割、宣教師に代わる方を受け入れる体制を作る必要があるだろうと思います。そうすると、後は人選の問題ですから、必ず良い方が見つかるでしょう。まず、学院の中でその

ような声、つまり宣教師に代わる方がもっと必要だという声を強くしていかなければなりません。その努力とそれを推し進める力を理事長、院長、学長、高・中校長で強力に進めていくべきだと思います。

古澤：西南学院における宣教師の貢献と意義というものが大であった、というよりも宣教師により、建学の精神が据えられたと思いますので、できれば今後もそのような先生方が送られてくることを期待しますね。南部バプテストの状況なども聞いておりますので、困難だと思いますが、時代とともにその点も変わってくる可能性もあるのではないかと思います。南部バプテストが元に戻ってくる時期もやがてくるのではないかという希望のようなものを

もって、今後にも期待したいと思えます。

司会：おかげさまで、宣教師と西南学院について大変有意義な座談会を持つことができました。改めて、西南学院がいかに関心を持って働いて、あるいは感化されてきたか、そしていかに多くを宣教師に負っているかを再確認することができまして、本当に感謝しております。長時間にわたり熱心に座談会に参加していただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

■この座談会は、2007(平成19)年9月18日、西南クロスプラザ2階ゲストルームで実施されたものです。